

近代沖縄“空手”の普及発展

盧 姜 威

1、はじめに

現在、世界的に普及発展している沖縄空手は、かつて「門外不出」の武術として、限られた一部の人達によって行われていた。廃藩置県（琉球処分）前の“空手”については、資料が乏しいため殆んど未解明のままである。廃藩置県後、“空手”は徐々に公開されるようになった。その一因は、当時沖縄の学校教育で「普通体操・兵式体操」などの学校体育が実施され、“空手”も正課体育として学校教育に導入されたことが考えられる。しかし、これについて、今まで事典類で指摘されたことはあるが¹、資料などに基いての検討はあまりなされてこなかった。そのため、廃藩置県から戦前までの近代沖縄における“空手”の全体像はハッキリと見えてこない。秘密裡に行われていた“空手”が表舞台に出て、普及発展していく姿を捉えるため、当時の新聞資料等を通して確かめていく作業が求められている。新聞は時の鏡のように、その時の“空手”の姿を映し出しているであろう。当時の新聞が“空手”をどのようにとりあげていたかを追跡することによって、その時代の“空手”が如何なるものであったかを知ることができよう。と同時に、当時の社会が“空手”に何を求めていたのかも浮き彫りになってくるであろう。

そこで、本稿では新聞資料等を通して、近代沖縄の“空手”を概観してみたい。

近代沖縄において、「空手」という表記はまだ定着していない。そこで、本稿では、広義的に「空手」を捉え、二重引用符「 ” 」で囲って“空手”とし、記述することにしたい。

沖縄では、去る太平洋戦争・沖縄戦で、“空手”関連資料に限らず、多くの文献資料が焼かれてしまった。残った文献資料は研究者らの努力によって、近年発掘されつつある。例えば、沖縄関係新聞資料は、以下のようなものが確認されている（断片的なものも含む）。

『琉球新報』（1894/12/16～1940/12/18）、『沖縄新聞』（1907/10/11～1911/7/22）、『沖縄毎日新聞』（1909/2/28～1914/12/31）、『沖縄朝日新聞』（1920/2/

7～1940/11/15)、『沖繩時事新報』(1920/2/19～8/7)、『沖繩日日新聞』(1920/9/8～1933/3/31)、『沖繩タイムス』(1921/5/29～1928/6/22)、『沖繩昭和新聞』(1928/9/4～9/21)、『沖繩日報』(1935/10/28～1940/12/18)、『日刊沖繩新聞』(1937/3/20)、『大阪毎日新聞 鹿兒島沖繩版』(1937/4/30、5/5)、『沖繩新報』(1941/1/1～1945/2/27)、『先島新聞』(1916/4/1～1926/9/30)、『先島新聞 附録宮古号』(1917/12/1～1919/9/30)、『八重山新報』(1921/2/1～1934/4/30)、『宮古時事新報』(1929～1936/9/19)、『海南時報』(1935/8/1～1945/12/30)、『宮古朝日新聞』(1941/9/19～1943/12/25)、『沖繩県史研究叢書17 植物標本から得られた新聞資料』(沖繩県文化振興会資料編集室[編] 2007年 沖繩県教育委員会)など²。

本稿の執筆にあたり、参考にした「近代沖繩“空手”関係資料」(紙面の都合により別機会で紹介したい)は、筆者が編集者の一員として『琉球・沖繩芸能史年表(古琉球～近代篇)』³を作成する傍らに蒐集したデータ、また2006年12月から一年間にわたり沖繩県立図書館でボランティアとして「空手関係資料」を整理した時に蒐集したデータを基に、『沖繩空手古武道事典』⁴等を参考にして作成したものである。なお欠けている部分については、今後の発掘を期したい。

2、近代沖繩“空手”の普及発展

(1) “空手”の学校教育への導入

廃藩置県後、「普通体操・兵式体操」などの中学校学科課程が実施されるようになった。(『琉球新報』明治31年4月1日)。“空手”は、「教科としての体操の指導趣旨にそった有効な手段となりうることから、『唐手体操』として随意科目、そして正課体育へと取り入れられていった」⁵、とされている。一方、“空手”の学校教育への導入時期について、「明治30年代」⁶・「明治34、5年頃」⁷などと説かれているが、いずれも明確な資料は示されていない。

では、正課体育としての“空手”の学校教育への導入時期はいつであったのか。また、導入される前の“空手”はどのようにして行われていたのか。次の事例を通してみたい。

- 1898(明治31)/6/13『琉球新報』

◎短信一束／首里一布衣生／(中略)／▲頑派の児童教育

教育の必要ハ流石の頑派連も多少気が附たと見え以前より同臭味の者共を語らひ桃原なる浦添朝忠氏（旧按司家にして久く清国に滞留し近年帰県せし同派の首領株）の邸内に集会し七八歳以上の学齡児童を勧誘し盛に漢籍（四書類）算術習字唐手（支那流の柔術の？）などの諸科目を教授せり講師ハ何つれの馬の骨やは知らされとも二三名許もある由にて生徒も亦五六十名以上あり勿論これハ例の門閥階級を柵に上げて士農工商何つれの子弟も入学せしむる規程なりと云また勉めて子弟の歡心を買はむ為めならむか時々腰弁などを提けて景色好き場所へ引卒し運動会遠足などの企てもありといへは常に彼等にありなれたる飲み喰ひ一方の会合とは些と変調子の趣向といふへし上の記事は「首里一布衣生」により「頑派の児童教育」について書かれたものである。この記事から、桃原の浦添朝忠の邸内で学齡児童を対象に、「漢籍（四書類）算術習字唐手（支那流の柔術の？）などの諸科目」が教授されていたことがわかる。つまり、当時の首里において、一部であるかもしれないが、学齡児童を対象に“空手”が教えられていた。

ここでもう一つ注目したいのは、“空手”についての表現である。記事では、「唐手」の後にわざわざ「(支那流の柔術の?)」と括弧を括って「支那流の柔術の?」と推測的な説明をしている。このことから考えると、当時において、“空手”はまだ一般的に知られていないのであろう。ちなみに、明治31年8月19日付の『琉球新報』の記事には、「支那流の武術」と称している。当時の“空手”は、「唐手」と表記され、中国の武術を意味するものと一般には考えられているが、「支那流の柔術の?」「支那流の武術」などの表記はこれまでにまだ確認されていない。「支那流の柔術の?」「支那流の武術」と表記されていることによって、当時の社会において、“空手”は中国の武術であるという認識が一般的であったと捉えてよいであろうか。

このように、廃藩置県後のしばらくの間、“空手”は一部の人々によって行われていたのではないかとと思われる。と同時に、その子弟への教育普及がなされることも注意される。

ところで、正課体育としての“空手”の学校教育への導入時期はいつであったのか。次に示す事例から、学校教育に取り入れられていく“空手”の実状をうかがい知ることができるであろう。

● 1905 (明治38) / 2 / 5 『琉球新報』

◎教育界／(中略)／▲中学校職員の唐手

昨年来同校職員は唐手に採るべきものあらんことを思ひ立ち直ちに着手したるに今や其成績宜しく唯だ一の惜むべきことハ教師の方にて秩序的の説明乏しき為め充分納得し兼ねる業あれど何れ熟練を積むの後充分なる理由を職員にて發明せん計画なりと我輩ハ希望す今の世国の如何を問はず有りとはゆるる現象ハ之を把えて研究すれば技術上体育上精神上大に裨補する所あれば唐手の方も亦大に利益する所あるべし吾輩ハ柔術に手を染めつゝある西洋人の未だ着手せざる先に県下中学校にありて此事の起れるを大に喜ぶものなり又他には教員自身の元氣にも大に影響する所あるべきを信ず (一記者)

上の記事は、明治38年2月5日付の『琉球新報』の「教育界」と題した記事である。その中に「中学校職員の唐手」の動向が取り上げられている。この記事から、中学校では、明治37年から職員が“空手”に取り組んでいたことがわかる。また、“空手”は「体育上精神上大に裨補する所」・「教員自身の元氣にも大に影響する所」あり、と学校教育への導入が歓迎されていたことがうかがえる。ただし、「教師の方にて秩序的の説明乏しき為め充分納得し兼ねる業あれど何れ熟練を積むの後充分なる理由を職員にて發明せん」とあるように、当時の“空手”の教え方は説明が乏しいため、学校教育へ導入するには、職員によるさらなる研究が必要であると説かれていることもうかがえる。これは、“空手”を学校教育へ導入するには“教科書”の必要性が考えられていたのであろう。そして、明治38年8月に当時の中学校の体操教諭花城長茂が作成した「空手組手」という教則は、そのことを物語っていると見えよう。さらに、明治41年10月に当時の中学校・師範学校の「拳法指南」である糸洲安恒が記した「唐手十ヶ條」は、「学校教育における指導理念を得ることとな」⁸とされている。

明治37年から中学校の職員が“空手”に取り組んで研究した上、体操式に組立てて「唐手運動」として明治38年1月より一般生徒に課することにした。このことを示す事例が、明治38年2月9日付の『琉球新報』の「中学師範学生の唐手があつたが其手の巧拙ハ扱て置き洋服の上脱ぎ姿に場を四分に立ちはだかり掛声と共に忽ち左にさし右につき前に後に手並揃へて発矢々々有繫は琉南の健児懦夫をして起たしむるに足る▲聞けば中学の方では追々生徒全体の稽古が始まるとのこと」

の記事、明治39年1月1日付の『琉球新報』の「◎昨卅八年の県下（一）／（中略）／◎中学教育／県立の中学校は首里に設置せるもの一校にして生徒六百二十名を収容し教員二十名（中略）従来此校に於ては学芸の奨励と共に大に体育を奨励し海に陸に種々の運動をなさしめ唐手運動の如きも之を一種の体操式に組立て実行せしめつゝある」の記事、明治41年9月15日発行の『沖縄教育』（第31号）の27-35頁の「県立中学校沿革／（中略）／（明治）三十八年—唐手稽古—通告簿—国旗行列—父兄懇談会—一月沖縄特有の拳法唐手の稽古を始む去年の末より職員一同教師に就きて研究せしが教育上価値あるを認め本年度よりは一般生徒に課すことゝせり」の記事である。

また、「明治三十八年本県師範学校及中学校に武道として拳法を採用するや（糸洲安恒）翁嘱托せられて教授の任を受け」（大正4年3月13日付の『琉球新報』）の記事と、「（糸洲安恒が学校の拳法指南に）嘱托されたのは明治三十八年拳法が初めて師範中学の武道として採用された時から」（大正4年3月14日付の『琉球新報』）の二つの記事をも、中学校が“空手”を明治38年1月より一般生徒に課したことは明らかといえよう。上の二記事より、中学校と同様明治38年に師範学校も“空手”を武道として採用し、糸洲安恒を“空手”指南に嘱托したことがわかる。

しかし、前述のように、中学校が“空手”を明治38年1月より一般生徒に課したことを明らかにすることはできたが、師範学校については、明治38年に“空手”が学校教育へ導入されたことを報ずる記事は確認することができない。ただし、明治39年6月27日付の『琉球新報』の「師範学校沿革略（三）／（中略）本（明治39）年四月からは一週間に二回の外は外出することを禁じて撃剣、柔道、唐手、水泳、テニスを殆んど正科の如くにやらせ」の記事からすると、明治39年4月時点で師範学校ではすでに“空手”が「正科」として行われていたことがわかる。ちなみに、明治38年以前に師範学生の“空手”の記事は見当たらないが、明治38年2月5日の首里通俗談話会の余興に師範学生の「唐手」が行われ（『琉球新報』明治38年2月5・9日付）、同3月27日の師範高等女学校証書授与式の余興で、師範生の「唐手、撃剣」などが行われ（同3月29日）、同12月20日の師範高女両校の学芸会で師範学生の「唐手」などが行われる（同12月21日）など、多くの“空手”の記事が掲載されている。

“空手”が学校教育へ導入されてから、学校行事で“空手”は頻繁に演じられるようになった。明治40年代に入ると、首里・那覇をはじめ、宜野湾、本部、島尻、西原、美里、国頭、東風平、恩納、中頭、与勝、遠く離島の久米島の学校でも行われるようになった。さらに、昭和11年に八重山登野城校、昭和13年に石垣校でも“空手”が演じられていた。

一方、学校現場での“空手”の指導に、多くの“空手”の大家達が携わった。例えば、糸洲安恒は、前述した通り明治38年に中学校・師範学校の“空手”指南に嘱託される。花城長茂は明治38年8月に当時の中学校の体操教諭として「空手組手」を作成した。また、明治35年5月21日付の『琉球新報』の記事からみると、花城長茂は明治35年から中学校の体操教諭として「矯正術」を教えていたことがわかる。このほかに、屋部憲通は明治39年5月4日に「師範学校教諭心得兼同校書記」に任命される。摩文仁賢和は明治45年7月14日に「中頭郡宮城尋常小学校代用教員」に任命される。そして、大正4年2月22日に、城間真繁は「首里校」、富名腰義珍は「那覇校」の訓導をしている。大正7年4月26日に、富名腰義珍は「泊尋常小学校」の訓導をしている。昭和14年5月11日に、宮城長順は「商業校」で“空手”を指導している。

ここまでみてきて、“空手”が学校教育へ導入されてから、学校を媒介として、沖縄県内各地へ着実に普及していくことは疑う余地がないと思われる。ただ、各学校においての“空手”の普及活動は、「近代沖縄“空手”関係資料」を見る限り必ずしも順風満帆ではなかったようにみえる。少なくとも、早い時期に学校教育に“空手”を導入した「一中」でさえ、大正5年5月9日に「其の他随意科として唐手部の設あるも目下斯道教師欠員の為め休課せり」（『琉球新報』）とあるように、“空手”の学課が休課に追い込まれている。そして、14年後の昭和5年6月6日に「県立第一中学校の唐手部は廃止されて既に十年を経過し今や同校体育部から殆んどその影を没せんとしてゐた矢先学生間に漸く唐手熱が勃興し来たり斯道先輩の後援のもとに唐手部を復活する事になり」（『沖縄朝日新聞』）とあるように、ようやく「唐手部」が復活された。また、「唐手ハ一種の体操見た様に仕込まれ、気合を以て活動する所従来とは異なるを以てちと異様の感を起して何となしに可笑しく相度りたり」（『琉球新報』明治38年11月13日）とあるように、「体操式に組立てられた」当時の“空手”が批判されることもあった。

(2) 地域行事などで演じられる“空手”

“空手”が学校教育へ導入される前から、地域行事では“空手”が行われていた。それを示す事例が次の記事である。

- 1898（明治31）/8/19『琉球新報』

綾門大綱後の大親睦会として赤平は綱曳の翌日、大中、桃原は去十四日に、山川は去十六日に孰れも村大親睦会を開きたる由なるが、儀保は一昨十七日国頭邸に於て大親睦会を開き、老壮幼打交りて酒を酌みかはし、酒間壮快なる数番の演説あり。余興には悲歌慷慨の剣舞あり、勇壮なる支那流の武術を演ずるあり。而して門内には綾門大道に於て名誉を得たる儀保特有の軍配扇形の旗頭を立て会中の人、意気天を突き歓笑の声四方に轟きたりしと聞く。

上の記事は、明治31年8月19日付の『琉球新報』で「綾門大綱後の大親睦会」の様子を取り上げた記事である。この記事から、明治31年8月17日に、首里儀保の国頭邸で綾門大綱後に大親睦会が開かれ、「支那流の武術・剣舞」などが演じられていたことがわかる。「支那流の武術」については、前述したように、当時において“空手”の名はまだ一般的に知られていないようで、「支那流の柔術」「支那流の武術」などと称していたのであろう。

上記のように、“空手”が学校教育へ導入される前から、地域行事の場面では“空手”が行われていたことがわかる。しかし、その行われていた地域は首里近辺に限られている。地方の地域行事で“空手”が演じられることを確認できたのは、“空手”が学校教育へ導入された後の明治40年に入ってから的事例である。例えば、明治40年8月9日付の『琉球新報』には「国頭郡青年会運動会景況」を取り上げた記事が掲載されている。この記事から、当時の国頭郡青年会運動会で「合同旗送競争、徒歩、千鳥競争、二人三脚、網潜、武装競争、唐手、人馬飛競争、マストハンド、同齡徒歩、兎飛競争、唐手、障害物競争、改正体操、徒歩、担架競争、人馬競争、計算競争、首引、徒歩、肩車、唐手、輸送競争、鯨競争、サクレース、自転車、三分間徒歩、関所破、撃剣、水車、個人唐手、柔道、抽籤行列、長距離チャード徒歩、綱引」など36回の競技が行われ、「唐手」は4回（うち、個人唐手1回）も行われていたことがわかる。

地方の行事に“空手”が演じられるようになるのが、“空手”が学校教育へ導入された後によく確認されるようになるのは何故なのか。次に取り上げる事例がその

一因を示している。

- 1907 (明治40) /12/7 『琉球新報』

◎中頭郡青年倶楽部／会員 OY 生

近来各郡区にては時世の要求により青年団なるもの大に盛なれどひとり中頭郡のみは是に応ぜざるの観なき能はずされど決してさには非ず従来本郡には師中両校出身各孤立せる青年会ありて十年来持続し来りしが時世はいつまでも本郡青年をして区々事を挙げしめず先づ両者聯合して一昨年は普天間に昨年は美里に於て暑中休暇を利用して盛大なる懇親会を開きしが今年に到り其役員(ママ)の熱心なる主張により其範圍を拡張して養、農、商、医の各中等学校生を網羅せる一大青年団を中頭郡青年倶楽部なる名の下に組織したり／而して去る八月十五日檄を伝へて普天間に其の初会を開きしが集まる者百二十余名他に來賓として農学校長増田先生を初め各小学校長並に先輩数名の來席を仰ぎたり当日午前中は規則及役員(ママ)の撰定をなし午後親睦会に移り席上會員数名及び來賓の有益なる談話あり次いで詩を吟ずる者唐手を演ずる者ありて興は津々として尽きず (後略)

上の記事は、「中頭郡青年倶楽部」について書いたものである。この記事から、明治40年8月15日に普天間で開かれた中頭郡青年倶楽部の開会式後の親睦会で「唐手」などが行われていたことがわかる。ここで注目したいのは、この「中頭郡青年倶楽部」は師範学校・中学校の出身者に「養、農、商、医の各中等学校生」らから構成されていることである。このことから考えると、師範学校・中学校等の出身者が学校で学習した“空手”を「親睦会」で披露したのであろう。つまり、“空手”が学校教育へ導入された後地方の地域行事で“空手”がよく演じられたのは、師範学校・中学校等の出身者が学校で学習した“空手”を地域に持ち帰って披露したこと(ママ)に一因があるといえよう。

このように、地域行事で“空手”が演じられる例は、“空手”が学校教育へ導入される前は首里近辺に限られているが、導入された後には国頭をはじめ、中頭、島尻、久米島などの地域でも確認されるようになった。

一方、この時期は、社会的にも“空手”を勧めていたのである。それを示す事例が次の記事である。

- 1909 (明治42) /12/10 『琉球新報』

島尻青年会／(中略)／▲青年会娯楽調査

現今郡民の取りつゝある娯楽は高尚のもの尠くして陋猥のもの極めて多し故に娯楽を高尚に導くの方針を以て此問題を総会に提出し其後委員を設けて調査する事に決せられたるものなるが種類を選択して調査せるものを評議員に於て修正追加したるもの左の如し／在来のものにして奨励すべきもの／一乗馬、二角力、三綱引、四棒躍、五爬龍船、六棒石槌石、七器械体操／在来のものにして不問に附すべきもの／一三味線、二素人芝居、三腰慰／在来のものにして禁止すべきもの／一毛遊／新たに奨励すべきもの／一唐手、二剣道、三柔道、四軍歌、五唱歌、六詩吟、七樂隊、八運動会、九遠足会、十水泳、十一談話会、十二討論会、十三新聞雑誌の購読、十四フートボール庭球野球等の各種遊戯

上の記事から、島尻郡青年会が娯楽調査を行い、「在来のものにして奨励すべきもの」、「在来のものにして不問に附すべきもの」、「在来のものにして禁止すべきもの」を決定、「新たに奨励すべきもの」として、「一唐手、二剣道、三柔道」などがあげられていたことがわかる。「新たに奨励すべきもの」に、“空手”が取り上げられていることからすると、当時の社会が“空手”を勧めていたことがうかがえる。

“空手”は学校行事・地域行事だけでなく、興行物として舞台で行われることもある。例えば、明治37年4月15日付の『琉球新報』の「出征軍人及家族救護第一回剣舞大会」という記事から、奥武山公園で沖繩義友会の出征軍人及家族救護第一回剣舞大会が開催され、「沖繩唐手」などが演じられたことがわかる。このことによって、“空手”は入場料をとって、見せ物として登場していることが明らかである。また、大正4年3月20日付の『琉球新報』の中座(劇団)の広告に、琉球古事「隠れ武士」(但シ、フー一切仲間唐手佐久川武勇伝)が上演芸題として出されていることから、“空手”の武勇伝を芝居化して上演されていたことが知られるのである。そして、大正7年5月4日付の『琉球新報』には、中座(劇団)の沖繩新公論社一週年紀念大演劇会の広告と、潮会(劇団)の武術鼓吹団大合同会の広告が出されている。「沖繩新公論社一週年紀念大演劇会」の広告に「唐手大家タル本部朝清、本部朝基、喜屋武諸氏ノ唐手ハ、此機会デナケレバ容易ニ観ル事ハ出来マセヌ」とあるように、身分の高い本部御殿の二男本部朝清・三男本部

朝基をはじめとする首里の士族たちが、中座の舞台で“空手”を演じていたことがわかる。一方、潮会では、「地方有志方の御望に依り、武術の達人募り当会に於て武術鼓吹団と大合同を催し」、仲村渠亀・知念次郎・国吉良康・仲村渠宇志・宮里三良・富山武太らにより、「唐手、棒の手、槍の手、財の手、十手の手」などの“空手”・“古武道”が演じられていたことがわかる。つまり、“空手”そのものが興行物として舞台で行われるようになったといえるのである。同じ日に、中座と潮会が、それぞれ“空手”を売り物にして、芝居と共に舞台にのぼらせたことからすると、当時の社会が見せ物としての“空手”を求めていることがうかがえる。しかも、大正7年5月11日付の『琉球新報』の「唐手や棒の手などの武術を見世物として、武張った人連の間に人気を博した」という記事から、見せ物として興行されている“空手”などが社会的に受け入れられていたことが知られるのである。

(3) “空手”の組織化

“空手”が学校教育へ導入されてから、学校行事・地域行事で“空手”はよく行われるようになった。しかし、しばらくの間“空手”の組織的な活動は教育機関である学校に限られている。例えば、師範学校で1907（明治40）年に新たに「唐手部」が設けられ、1908（明治41）年2月7日に「唐手奨励会」（会長屋部憲通）が行われていた（明治41年2月10日付の『琉球新報』）。また、明治44年1月24日に師範学校で「唐手大会」が開かれ、師範生の「唐手八十組」・「組手四組」、中学生の「唐手五組」、富名腰義珍の「セーサン」、喜友名氏の「パツサイ」、屋部憲通の「五十四歩」、糸数氏の「ナイハンチン」等が行われていた（明治44年1月25日付の『琉球新報』）。そして、1918（大正7）年3月20日に師範学校講堂で年中行事の一つである「武術研究会」が催され、生徒たちの「唐手の分解・型・準備・試合」等、本部朝勇の「シヨーチン」、喜友名翁の「パツサイ」、知念翁の「棒使」、屋部憲通の「五十四歩」、「各専門家の学校の教授の型に対する質疑応答並に批評」などが行われていた（大正7年3月21日付の『琉球新報』）。

このように、明治期の教育機関である学校を舞台に、“空手”の組織化への胎動が始まりつつあった。

一方、大正7年に首里の摩文仁賢和の自宅を会合所として、「唐手研究会」が設立された⁹、といわれている。しかし、「唐手研究会」は具体的にどのような

活動を行なったか、組織としての目的は何であったのかについてハッキリした事はわかっていない。なお、『「からて」九・十合併號』（尹曦炳 1947年10月 韓武館）の「特集 空手を語る」で摩文仁賢和は、「實は大正十年だつたと記憶していますが、私達空手師範の者が沖縄で研究会を始めたことがありました」と大正10年に「研究会」を始めたことを述べている。さらに、摩文仁賢和は、「私達は、その当時眞剣に、熱心に研究工夫して、正しい、合理的な型について勉強したものです。富名腰（義珍…筆者註）さんも、ずつと後になつて研究会に参加して、駈足的に勉強しました。参考のため⁽¹²⁾書いておいた私のノートなども随分熱心に寫したり、型について私に聞いたりしていたのを記憶しています」と「研究会」の様子について述べている。このことから、当時の「研究会」では、「型」を研究したり、研究ノートを写したり、などの研究活動が行われていたことがうかがえる。

1918（大正7）年6月から昭和初期までの新聞資料は断片的にしか残っていないためか、「唐手研究会」についての記事は見当たらない。ただ、1918（大正7）年に、前述の3月21日付『琉球新報』の師範学校の「武術研究会」の報道、4月26日付の『琉球新報』の京都の武徳会演武大会（5月4日）に、富名腰義珍が棒術出演者として参加との報道、5月4日付の『琉球新報』の仲村渠亀・知念次郎・国吉良康・仲村渠宇志・宮里三良・富山武太らの「武術鼓吹団」が潮会（劇団）と大合同会を催す、との報道、5月4・5日付の『琉球新報』の沖縄新公論社一週年記念大演劇会で「唐手大家タル本部朝清、本部朝基、喜屋武諸氏ノ唐手」が演じられる、との報道、などからみると、1918（大正7）年頃には、“空手”の活動が活発であったことがうかがえる。

沖縄において“空手”の大家達によって結成され、はっきりした目的・活動内容を持った“空手”の組織は、おそらく今まで言及されて来なかった「沖縄武道協会」であろう。大正14年5月23日付の『沖縄朝日新聞』に「琉球武術の普及を計る沖縄武道協会」という記事が掲載されている。

- 1925（大正14）/5/23『沖縄朝日新聞』

琉球武術の普及を計る／沖縄武道協会／◇県下各地に支部設置

宮城長順、摩文仁賢和、大城朝恕、城間真繁、屋比久孟伝、喜屋武朝徳、

等琉球武術の大家連の発起で沖縄武道協会なるものが設立された／第一項

県民体育の向上と健全なる精神の涵養／第二項 本県特有の武術の研究及普及／第三項 其の他各種武道及運動法の奨励を目的として其の目的を達する為め左の事業をなす事になつてゐる／第一項 毎年一回武道大会を開催す／第二項 毎年二回各支部大会を開催す／第三項 本会々場（道場の設立）の経営をなす／第四項 本会々員の他府県視察及武道研究派遣／第五項 本会の目的を達する為めの各種の講演会／本月下旬演武大会／◇唐手の研究に南清へ派遣／尚ほ追々は協会から研究員を唐手の本場たる南清地方に派遣し一方に於いては琉球武術の宣伝の為めに中央にも出張せしむる計画もあるといふ協会では設立第一回の演武大会を本月の下旬首里那覇・与那原三ヶ所で勇ましく開催すると

この記事から、1925（大正14）年5月23日前に宮城長順、摩文仁賢和、大城朝恕、城間真繁、屋比久孟伝、喜屋武朝徳、等「琉球武術」の大家達の発起によって「沖縄武道協会」が設立されたことがわかる。また、「沖縄武道協会」の目的は、沖縄県民体育の向上と健全なる精神の涵養、その他各種武道及運動法の奨励、「本県特有の武術」の研究及び普及とし、活動内容は、毎年1回武道大会の開催、毎年2回各支部大会の開催、道場の設立・経営、会員の他府県視察及び武道研究派遣、各種の講演会の開催としていること、などがわかる。そして、“空手”の研究のために“空手”の本場とされる中国の南地方に研究員の派遣、「琉球武術」の宣伝のために日本本土へ研究員を出張させるなどが計画されていたこと、大正14年5月の下旬に首里・那覇・与那原の3ヶ所で「第一回の演武大会」の開催が予定されていたこともわかる。（以上のことからみてもわかるように、「沖縄武道協会」は柔道・剣道などの日本本土の武道組織ではなく、沖縄“空手”を中心に研究・普及するために“空手”の大家達によって結成された組織であるといえよう）。

これまでは、1926（大正15）年3月に設立されたとされている「沖縄唐手倶楽部」が、「沖縄の空手史上初めての組織団体である」¹⁰といわれてきた。ところが、上記にみてきたように、1925（大正14）年5月23日前に設立された「沖縄武道協会」が、「沖縄唐手倶楽部」とされている組織よりも先に設立されていたこととなる。

「沖縄唐手倶楽部」は通称クラブグァーの“空手”道場で、会長は本部朝勇、主任教授は宮城長順と摩文仁賢和が務めていたとされている¹¹が、「沖縄唐手倶楽

部」という呼称について、いつ頃から使われるようになったのかについては議論されて来なかった。確認できた資料等で、「沖縄唐手倶楽部」という呼称をはじめて使ったのは、1934（昭和9）年3月23日の宮城長順の「唐手道概説」（手書き原稿）である。宮城長順が「唐手道概説」で、「大正十五年三月沖縄唐手倶楽部創立越えて昭和五年十一月廿一日沖縄県体育協会創立に当り同会ノ唐手部として合併す」と大正15年3月に「沖縄唐手倶楽部」が創立され、昭和5年11月21日に「沖縄県体育協会」の創立に伴って、「沖縄唐手倶楽部」は「沖縄県体育協会」の「唐手部」として合併されたということを述べている。「沖縄県体育協会」について、昭和5年11月22日付の『沖縄朝日新聞』に「県下の体育団体を網羅して沖縄県体育協会生る」と「沖縄県体育協会」の創立の記事が見られる。

● 1930（昭和5）/11/22『沖縄朝日新聞』

県下の体育団体を網羅して／沖縄県体育協会生る／昨日の総会で組織を変更／会長吉田部長△副会長当間重剛氏

本県の体育向上に最大の努力を払つて来た沖縄体育協会は今回各種体育団体を網羅して県一団に組織を変更することになったので昨日午後三時から県会議事堂に於て組織変更の総会を開いた／体協から当間会長以下各役員／唐手協会から屋部、宮城、大城の諸氏／卓球協会から古賀氏／（中略）／沖縄県体育協会々則／（中略）／第五條本会に左の部を置く／△庶務部△野球部△庭球部△卓球部△排籃球部△陸上部△水上部△剣道部△柔道部△唐手部△相撲部△弓術部△競技検査部／（中略）／第十三條総裁には沖縄県知事の職に在る者会長には沖縄県学務部長の職に在る者を推挙す（中略）／会則の審議を終つて役員選挙に移り左の如く決定して午後五時閉会した／会長 吉田学務部長／副会長 当間重剛／（中略）／唐手部 宮城長順△大城朝恕△新里仁安△徳田安貞／（後略）

この記事の中で、「唐手協会から屋部、宮城、大城の諸氏」と集まった「屋部憲通・宮城長順・大城朝恕」らは「唐手協会」からのメンバーであると述べられている。ところで、同じく「沖縄県体育協会」の創立を取り上げた記事が、『沖縄教育』（第186号）¹²の99-102頁で「沖縄県体育協会創立総会」と題して掲載されている。その中で、「唐手倶楽部等の会員多数出席」とあり、集まった代表者には「唐手倶楽部」（「唐手協会」ではなく）のメンバーがいると述べられている。

このことから、当時において、「唐手協会」は「唐手倶楽部」と同じ組織を指していることがうかがえる。つまり、宮城長順が「唐手道概説」でいっている「沖縄県体育協会」の「唐手部」として合併された「沖縄唐手倶楽部」は、「唐手倶楽部」或は「唐手協会」と同じ組織の、異った呼称であるといえよう。

ところが、「沖縄唐手倶楽部」（「唐手倶楽部」、「唐手協会」）は、1925（大正14）年5月23日前に設立された「沖縄武道協会」とはどういう関係にあるのか。宮城長順は「唐手道概説」で「沖縄唐手倶楽部」は大正15年3月に創立されたとしているが、これについての新聞記事等は確認できていないため、具体的なことを指摘することができない。ただ、「沖縄武道協会」は前述のように、沖縄“空手”を研究・普及するために“空手”の大家達によって結成された組織である。「沖縄武道協会」と「沖縄唐手倶楽部」には共通のメンバー宮城長順・大城朝恕らがいることだけを指摘しておこう。

「沖縄武道協会」が設立された後、「県下各地に支部設置」と関係しているのか、多くの“空手”道場が現れるようになった。1925（大正14）年10月には、首里にある摩文仁賢和の自宅の裏手に「沖縄唐手研究倶楽部」という道場が設立されたとされている¹³。また、1926（大正15）年3月に設立されたとされている「沖縄唐手倶楽部」とはどんな関係であるかはまだはっきりとしたことがわかっていないが、大正15年1月31日付の『沖縄タイムス』に「若狭町に新築の唐手研究倶楽部」という記事が掲載されている。記事から、若狭町に新築の「唐手研究倶楽部」（本部朝勇・宮城長順ら）が落成式・発会式をひかえていたことは読みとれる。「当時那覇に唐手家が集まる『唐手研究クラブ』（俗称若狭クラブ）という道場があり¹⁴」という文から、1926（大正15）年1月31日以後に「唐手研究倶楽部」が発足したことがうかがえる。そして、1927（昭和2年）12月頃に具志川の天願貞成宅に「唐手の道場」が設けられた（昭和2年12月2日付の『沖縄朝日新聞』）。

「沖縄武道協会」の研究員の派遣・「第一回の演武大会」の開催などの計画については、この時期の新聞資料が乏しいためか、それについての記事は見当たらない。しかし、1928（昭和3）年の宮城長順の上洛、1929（昭和4）年の摩文仁賢和の上阪¹⁵、1936（昭和11）年2月の宮城長順の上海での武術交流活動¹⁶などと、完全に無関係であるとは言い難いであろう。

「沖縄武道協会」はハッキリした目的・活動内容を持ち、“空手”の大家達によっ

て結成された、いわゆる“空手”の民間組織である。大正後期から昭和初期にかけては、こういう“空手”の民間組織の活動が一番活発な時期であった。しかし、昭和5年11月22日付の『沖縄朝日新聞』の「県下の体育団体を網羅して沖縄県体育協会生る」の記事より、1930（昭和5）年11月21日に「沖縄県体育協会」の創立に伴って、当時の「唐手協会」は「沖縄県体育協会」の「唐手部」として合併されたことがわかる。「総裁には沖縄県知事の職に在る者会長には沖縄県学務部長の職に在る者を推挙す」の一文から、“空手”の組織は官製化されたことが知られる。

さらに、1933（昭和8）年12月26日に、「明治三十五年五月に創立せられたる大日本武徳会委員部にては時の趨勢に鑑み其の内容を整え昭和八年十二月二十六日支部に昇格すると同時に唐手道を武道の種目に編入し本部の認可を受く」¹⁷と当時の大日本武徳会沖縄県支部常議員宮城長順が述べているように、「唐手道」は「大日本武徳会」本部の認可を受け、武道として「大日本武徳会」の組織に取り込まれていた。そして、昭和9年3月、宮城長順らが「唐手」の段級の認定方法及びその他規程についての審議¹⁸をへて、昭和9年6月、武徳会支部で「唐手」の段級審査会が設置される¹⁹ことになった。

ここで一つ指摘したいことは、「沖縄県体育協会」の“空手”部が「大日本武徳会」の組織に取り込まれていたのではなく、「体育協会のほかに武徳会支部があります、その両方に空手部があります」²⁰と、昭和11年10月25日の「沖縄空手道大家の座談会」で宮城長順が述べているように、「沖縄県体育協会」の“空手”部と「武徳会支部」の“空手”部が併存していたのである。そして、「柔剣道にも有段者会のような別個の組織があつて、体協や武徳会支部の柔道部剣道部の背景をなしています、それと同じ意味で振興協会が空手部の背景になる」²¹と述べられているように、「沖縄県体育協会」の“空手”部と「武徳会支部」の“空手”部の背景をなすため、「空手振興協会」の組織の必要性が説かれ、1936（昭和11）年12月に宮城長順・仲宗根源和らによって「沖縄県空手道振興協会」が発足された²²。

なお、「沖縄空手道大家の座談会」に学務部長・軍関係者など出席者の顔ぶれからすると、この会は官主導のもとに進められていたことがうかがえる。翌日の26日付の『琉球新報』3面は「名称を“空手”に統一し／振興会を結成！」と題した記事でこれを取り上げて報じた。ここにおいて、“空手”の名称が「唐手」から

「空手」に統一されることとなった。ただ、その後の“空手”の記事について、『琉球新報』では「空手」と報じているに対して、『沖縄日報』では「唐手」と報じている²³。

「沖縄県空手道振興協会」の発足後の活動について、仲宗根源和の『空手道大観』（1938年5月 東京図書株式会社）に、宮城長順・花城長茂・仲宗根源和らを中心とした「沖縄県空手道振興協会」の指導部が、昭和12年3月28日に「空手道基本型」（第一～十二段）を制定したことが紹介されている。しかし、これ以外に目立った活動は確認されていない。

(4) “空手”の県外への普及

これまで沖縄県内における“空手”の普及状況をうかがってきた。ここでは、“空手”の県外への普及はどのような展開をしていたのかをみていきたい。

廃藩置県後、沖縄を行き来する日本本土出身の人が沖縄で見たもの・体験したことを土産話として本土へ紹介した記事がある。明治39年9月22日付の『琉球新報』に次ような記事が掲載されている。

- 1906（明治39） / 9 / 22 『琉球新報』

◎大学教授の沖縄観

某私立大学の一講師沖縄より帰り来りての談話なりとて内地諸新聞に記載せる所左の如し／（中略）／▲沖縄の教育／（中略）日露戦後師範学校中学校に於ては尚武の氣象勃興して撃劍柔術等盛んに流行するに至れり由来琉球人は気候の関係もあらんが優柔不断にして活潑に乏しき人民なるが今や内地の武術を輸入して尚武の精神を涵養するに至れるは直に沖縄将来の進歩上大に歎ぶべき事なり序でに沖縄には沖縄古有の武術として拳法なるものあり之れは蓋昔時支那より伝来したるものならん此拳法は内地の柔術と略々相似たる点あるが柔術よりは一層激烈なるが如し／（後略）

この記事は、日本本土某私立大学の一講師が沖縄で体験したことを本土の新聞紙で紹介したものである。そのなかに、「沖縄には沖縄古有の武術として拳法なるものあり之れは蓋昔時支那より伝来したるものならん此拳法は内地の柔術と略々相似たる点あるが柔術よりは一層激烈なるが如し」と、沖縄“空手”について、中国から伝来したもので内地の柔術と少し似ているが、一層激しいものである、と

いうことも紹介している。このことからみてもわかるように、この時点において、沖縄“空手”の存在が日本本土の新聞紙上で紹介されることになったのである。

しかし、これはあくまでも沖縄“空手”の存在を日本本土に紹介したことにすぎない。沖縄“空手”を実際に披露したのはもっと後のことである。

それは、明治41年8月に京都武徳会の演武大会で中学の生徒たちが“空手”の型を数番演じたことであると思われる。このことについて、まず、明治41年7月19日付の『琉球新報』に「中学生の武徳会出席」の記事が掲載され、「本県固有の武術たる唐手を二三手奏演する旨武徳会に申し込み置きたる由」と武徳会で“空手”を演ずる予定が報じられている。そして、明治42年4月1日に中学校校友会発行の雑誌『球陽』第18号の「雑報」に「唐手部記事」が掲載され、「昨年八月武徳会青年大会に出席せる柔剣道の選手等は武徳会の希望によりて唐手を演ぜし」と中学の柔剣道の選手等は武徳会で“空手”を演じたことが紹介されている。なお、同「唐手部記事」の「たの新聞抜載」に「唐手の型数番を、沖縄中学の生徒に依つて演ぜられた。是れは曩きに同県中学生が修学旅行の為め京都へ来た時、一寸と武徳殿で演じたのを（後略）」とあるように、明治41年8月前に、中学生が修学旅行の為め京都へ行った時、武徳殿で“空手”を演じていたことがうかがえる。しかし、それについての記事はみあたらない。

それから、明治44年4月18日に山内盛彬・島袋盛敏ら6名が東京の柔道の元祖・嘉納治五郎の講道館で「唐手」の演武などを行った²⁴。大正2年5月25日に沖縄出身巡查神村朝貞が熊本武徳会で「唐手」を演じた²⁵。また、大正7年4月26日付の『琉球新報』の「武徳会演武大会」の記事より、大正7年5月4日に京都の武徳会演武大会に富名腰義珍が棒術出演者として出席を予定していたことがわかるが、その後の記事がみあたらないため、具体的なことはわかっていない。

明治40年代から日本本土で沖縄“空手”が実際に演じられるようになったが、これもまだ沖縄“空手”を披露しただけにすぎず、しかも、これらは、武徳殿・道場などで行われたことから、限られた人にしか知られない。実際に沖縄“空手”が日本本土に普及し始めたのは大正後期のことになる。

大正後期から昭和初期にかけて、「沖縄武道協会」が設立されるなど、沖縄での“空手”の活動が活発であったことは前述の通りである。一方、この時期は、日本本土において沖縄“空手”が本格的に普及された時期でもあった。

日本本土に沖縄“空手”が本格的に普及した大きなきっかけは、大正11年に東京博物館で開かれた文部省主催の運動体育展覧会で、当時の沖縄尚武会長であった富名腰義珍が“空手”を紹介したことであるといえよう。これについて、『沖縄タイムス』は、大正11年4月23・25日にそれぞれ「中央で紹介さるゝ沖縄の武術」(上)・(下)という記事を掲載して紹介している。それ以来、富名腰義珍は東京で“空手”の指導普及につとめ、大正11年11月25日に、東京で“空手”史上初の著書『琉球拳法 唐手』(武俠社)をあらわした²⁶。

沖縄“空手”が日本本土で広く知れわたるようになったもう一つの大切な事件がある。本部朝基が大正11年11月に京都で催された拳闘対柔道の試合に飛入り参加し、露国拳闘家を倒したことである。

この試合を、『沖縄朝日新聞』は大正14年6月27日に「露国拳闘家に勝つた本部氏の豪勇」と題した記事で紹介している。この記事の中で、「東京でも昨今大評判なり機を見るに敏なる出版業者は本部氏の武勇を讃える記事の蒐集に取らり雑誌キングの如きは八月号に露人との試合記を掲載すべく準備中である」と報じている。本部朝基の飛入り試合が大評判のため、雑誌『キング』は「八月号」にこの試合の掲載を準備していることを紹介している。そして、大正14年9月1日に大日本雄弁会講談社(現講談社)発行の『キング』9月号(鳴絃楼主人)は、「肉弾相打つ 唐手拳闘大試合」と題した記事を掲載して紹介している。時の有名な国民雑誌『キング』²⁷が特集したことから、本部朝基の飛入り試合の評判ぶりを推察することができよう。さらに、昭和3年9月に『龍潭』第25号は、「斯道の達人本部朝基氏が世界的拳闘家として有名な外国人を京都大衆の面前で一撃の下に倒したその時より終に世界的武術としてその価値は世人の認むる所となつたのである」²⁸、「本部先生の勝利は、世人をして唐手に対し驚嘆の眼を注がすに充分であつたのである」²⁹と本部朝基の勝利が“空手”の知名度を高めたことを讃えている。

このように、本部朝基の飛入り試合が世人の“空手”への関心を高めるのに大きな力となったことをうかがい知ることができよう。その後、1926(大正15)年1月31日に大阪で本部朝基は自ら主宰の「唐手術普及会」から著書『沖縄拳法唐手術 組手編』を刊行した³⁰。

富名腰義珍、本部朝基、さらに宮城長順、摩文仁賢和らの普及活動によって、

日本本土への沖縄“空手”の普及は飛躍的に進んでいった。このことについては、すでに先学によって指摘されているように、当時の出版物・学校の“空手”部設置の状況などからみても“空手”への関心が高まって行く様子をうかがい知ることができる³¹。

1924（大正13）年から1935（昭和10）年までの日本本土の学校における“空手”部設置の状況は、1936年1月28日の宮城長順「琉球拳法唐手道沿革概要」³²によると次の通りになる。

- (1) 東京の部：①慶応義塾体育会唐手部（大正13年）、②東京帝国大学唐手部（大正15年）、③（旧制）第一高等学校唐手部（不明）、④早稲田大学学友会空手部（昭和6年）、⑤日本大学唐手研究会（不明）、⑥拓殖大学空手部（昭和5年）、⑦松蔭女学校（不明）、⑧日本大学医科空手研究会（不明）。
- (2) 大阪の部：①関西大学唐手部（昭和5年）、②関西学院大学唐手部（昭和5年）、③大阪高等薬学専門学校唐手部（不明）、④大阪高等医学専門学校唐手部（不明）。
- (3) 京都の部：①京都帝国大学柔道（唐手）部（昭和2年）、②立命館大学唐手拳法部（昭和10年）。

1935（昭和10）年までに日本本土で出版された“空手”の出版物は次のようなものがある。

- ①1922（大正11）年11月に富名腰義珍の『琉球拳法 唐手』（武俠社）
- ②1925（大正14）年3月に富名腰義珍の『鍊膽護身 唐手術』（大倉広文堂）（昭和7年11月に十版）
- ③1926（大正15）年1月に本部朝基の『沖縄拳法唐手術 組手編』（唐手術普及会）
- ④1930（昭和5）年1月に三木二三郎・陸奥瑞穂の『拳法概説』（東京帝国大学唐手研究会）
- ⑤1930（昭和5）年11月に慶応義塾空手研究会の『拳』創刊号
- ⑥1931（昭和6）年に慶応義塾空手研究会の『拳』第二号
- ⑦1932（昭和7）年2月に慶応義塾空手研究会の『拳』第三号創立七周年記念号
- ⑧1932（昭和7）年3月に本部朝基の『私の唐手術』（東京唐手普及会）
- ⑨1932（昭和7）年6月に慶応義塾体育会内対抗競技部空手会の『拳』第四号

- ⑩1932（昭和7）年11月に慶応義塾体育会空手部の『拳』第五号体育会入部記念号
- ⑪1933（昭和8）年2月に植村常次郎の『富名腰義珍先生記念還暦詩文集』（大日本唐手研究会）
- ⑫1933（昭和8）年6月に慶応義塾体育会空手部の『拳』第六号
- ⑬1933（昭和8）年8月に陸奥瑞穂の『唐手拳法 全』（東大唐手研究会）
- ⑭1933（昭和8）年10月に慶応義塾体育会空手部の『拳』第七号
- ⑮1934（昭和9）年3月に摩文仁賢和の『攻防自在護身術空手拳法』（大南洋社）（4月に再版）
- ⑯1934（昭和9）年6月に慶応義塾体育会空手部の『拳』第八号
- ⑰1934（昭和9）年7月に糸満盛信の『唐手術の研究』（新光閣）
- ⑱1934（昭和9）年10月に慶応義塾体育会空手部の『拳』第九号十周年記念
- ⑲1934（昭和9）年10月に摩文仁賢和の『空手拳法十八の研究』（空手研究社興武館）
- ⑳1934（昭和9）年12月に空手研究社の『空手研究 第一輯』（空手研究社興武館）
- ㉑1935（昭和10）年5月に富名腰義珍の『空手道教範』（広文堂書店）
- ㉒1935（昭和10）年10月に摩文仁賢和・仲宗根源和『空手道入門』（空手研究社興武館）
- などである。

日本本土においての“空手”熱は逆に沖縄にもその影響を及ぼした。例えば、1930（昭和5）年6月6日に『沖縄朝日新聞』は、「復活される一中唐手部／本日盛大な発会式／帝都に於ける唐手熱の隆盛は既報の通りで却つて地元の本県の豊を摩するほどになり県下唐手界は帝都よりの刺戟を受けるといふような珍現象を呈してゐる／県立第一中学校の唐手部は廃止されて既に十年を経過し今や同校体育部から殆んどその影を没せんとしてゐた矢先学生間に漸く唐手熱が勃興し来たり斯道先輩の後援のもとに唐手部を復活する事になり本日午後二時より同校柔道場に於いて発会式を挙げる事になつたが本日は発会式後県下斯道の大家先輩の演技もある」と、帝都の「唐手熱」の刺戟を受け県立第一中学校の「唐手部」が復活したことを報じている。

日本本土で受入れられた沖縄“空手”は、前述のように1933（昭和8）年12月26日に、「大日本武徳会」本部の認可を受け、武道として「大日本武徳会」の組織に取り込まれていった。そして、柔道・剣道と同じように、日本武道の1つとしての「空手道」が認められるようになり、映画にも登場して³³日本全国・海外へとさらに普及・発展していった。

3. まとめ

以上、近代沖縄“空手”について、新聞資料等を中心に検討してきた。その結果、以下のようなことが明らかになった。

廃藩置県後、沖縄の学校教育で「普通体操・兵式体操」などの学校体育が実施され、軍事色をおびた教育内容となっていく中で、“空手”も正課体育として学校教育に導入されたことがうかがえる。言い換えれば、“空手”は軍事教育の確立・戦力増強の手段に利用されていたと言えよう。ただ、学校で行われる“空手”は従来とは異なり、「体操式」に組立てられて行われていたのである。また、一中のように大正5年5月に“空手”の学課が休課に追い込まれていたなど、学校現場で“空手”が、必ずしも必須不可欠のものでもなかったことも知られるのである。

一方、学校教育に導入されることによって、「門外不出」の武術として、限られた一部の人達によって行われていた“空手”が、学校生徒をはじめ、農村の人達にも浸透するようになり、地域の行事・学校の行事の演目としても登場することになった。また、明治42年頃に、村の青年達に対して新たに奨励すべきものとして、“空手”が取り上げられるなど、社会的に“空手”を勧めていたことがうかがえる。さらに、大正年間になると、一般観衆に求められ（「武士道鼓吹」の好宣伝手段としても），“空手”の武勇伝を芝居化したり、“空手”そのものを興行物として舞台上せたりするようになった。

大正10年頃には、民間において“空手”の大家達による研究活動が活発になっていたと思われる。“空手”の型の合理性について研究したり、またそのノートを書いたりしていたことから、“空手”の大家達の間には交流活動が盛んであったことがうかがえる。そして、大正14年5月頃に、宮城長順、摩文仁賢和、大城朝恕、城間真繁、屋比久孟伝、喜屋武朝徳、等「琉球武術」の大家達の発起によって、はっきりした目的・活動内容を持った“空手”の民間組織「沖縄武道協会」が設立され

た。「沖縄武道協会」が設立されたあと、首里の「沖縄唐手研究倶楽部」、若狭の「唐手研究倶楽部」、具志川の「唐手の道場」など、沖縄県下に多くの“空手”道場が現れるようになるなど、“空手”の民間組織が一番活発な時期の到来を見つつあった。

しかし、1930（昭和5）年11月21日に「沖縄県体育協会」の創立に伴って、当時の「唐手協会」（「唐手倶楽部」）は「沖縄県体育協会」（知事が総裁、学務部長が会長）の「唐手部」として合併され、“空手”の組織も官製化されていった。さらに、1933（昭和8）年12月26日に、「大日本武徳会」本部の認可を受け、“空手”は武道として「大日本武徳会」の組織にも取り込まれていった。そして、1936（昭和11）年10月25日に官主導の「沖縄空手道大家の座談会」が催され、翌日の『琉球新報』で大きく取り上げられ、“空手”の名称を「唐手」から「空手」に統一するという運びとなった。その後、「沖縄県体育協会」の“空手”部と「武徳会支部」の“空手”部の背景をなすため、「空手振興協会」の組織の必要性が説かれ、1936（昭和11）年12月に宮城長順・仲宗根源和らによって「沖縄県空手道振興協会」が発足された。

沖縄“空手”の県外への普及については、1922（大正11）年に富名腰義珍と本部朝基の活躍がもたらす影響が大きかったと思われる。その後、富名腰義珍、本部朝基、宮城長順、摩文仁賢和らの普及活動によって、日本本土への沖縄“空手”の普及は飛躍的に進んでいき、多くの大学で“空手”部が設置され、“空手”の出版物が多数刊行されるなど、日本本土において“空手”への関心が高まっていった。そして、その“空手”熱は、沖縄県立第一中学校の「唐手部」の復活にも影響を及ぼし、“空手”の映画化にも一役をかい、“空手”の海外への普及・発展を準備するものとなっていったように思われる。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、沖縄県立図書館・沖縄県立公文書館などの職員の方々にお世話になりました。また、波照間永吉教授より多大なるご指導を、波照間ゼミの皆様よりあたたかいアドバイスなどをいただきました。心より感謝を申し上げます。

注

- 1 「1908年（明治41）には、糸洲安恒によって意見書（「唐手十訓」）が沖縄県学務課に提出され、唐手は学校体育の正科として社会的にも受け入れられる。その後、大正から昭和の初期にかけて船越義珍や摩文仁賢和、上地完文、宮城長順らによって本土に紹介され、名称も唐手から（空手）と表記されるようになった」『沖縄大百科事典』下巻（沖縄大百科事典刊行事務局編 1983年4月 沖縄タイムス社 p.771）
- 2 琉球・沖縄芸能史年表作成研究会編『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代 篇）』2010年3月31日（財）国立劇場おきなわ運営財団 pp.ix-x
- 3 琉球・沖縄芸能史年表作成研究会編『琉球・沖縄芸能史年表（古琉球～近代 篇）』2010年3月31日（財）国立劇場おきなわ運営財団
- 4 高宮城繁等編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房
- 5 高宮城繁等編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房 p.669
- 6 高宮城繁等編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房 p.668
- 7 沖縄県教育委員会 1975年2月『沖縄県史』（第5巻）沖縄県教育委員会 p.558
- 8 高宮城繁等編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房 p.672
- 9 摩文仁賢榮 2001年10月『武道空手への招待』株式会社三交社 p.60。また、高宮城繁等編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房 p.711。
- 10 高宮城繁等編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房 p.129
- 11 高宮城繁等編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房 p.129
- 12 比嘉重徳編 1930年12月30日『沖縄教育』（第186号）沖縄県教育会事務所
- 13 高宮城繁等編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房 p.526
- 14 高宮城繁等編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房 p.403
- 15 尹曦炳 1947年10月『「からて」九・十合併號』韓武館 p.8
- 16 高宮城繁等編著 2008年8月『沖縄空手古武道事典』柏書房 pp.584-585
- 17 宮城長順 1936年1月28日「琉球拳法唐手道沿革概要」（宮里栄一『沖縄伝剛柔流空手道』1978年7月 所収）
- 18 昭和9年3月25日付の『琉球新報』
- 19 昭和9年6月26日付の『琉球新報』
- 20 遠山寛賢 1956年1月『奥技秘術 空手道』鶴書房 p.175
- 21 遠山寛賢 1956年1月『奥技秘術 空手道』鶴書房 p.175

- 22 仲宗根源和 1938年 5月 『空手道大観』 東京図書株式会社 p.301
- 23 例えば、昭和15年 3月 3日付の『琉球新報』・『沖縄日報』
- 24 宮城仁之助 1911年 6月 1日 『龍潭』 沖縄県師範学校校友会 pp.183-185
- 25 大正 2年 5月 30日付の『琉球新報』
- 26 富名腰義珍 1922年 11月 『琉球拳法 唐手』 武俠社
- 27 「講談社の野間清治は、1925年に《キング》を創刊して(100万部の国民雑誌)を実現」
(『大百科事典』 平凡社 1985年 3月 p.283)
- 28 高嶺朝保「唐手部便り」(『龍潭』 第25号 昭和 3年 9月 p.134)
- 29 高嶺朝保「唐手部便り」(『龍潭』 第25号 昭和 3年 9月 p.134)
- 30 本部朝基 1926年 1月 『沖縄拳法唐手術 組手編』 唐手術普及会
- 31 例えば、1925(大正14)年 3月に出版された富名腰義珍の『鍊膽護身 唐手術』(大倉
広文堂)について、宮城篤正は「初版刊行の大正十四年から昭和二年までに七版を重ね
ていることから見ても人気の高さがわかり、空手人口の拡大して行く様子を伺い知るこ
とが出来る」(『攻防自在護身術空手拳法』 2006年復刻版 p.156・解説)、と指摘している。
- 32 宮里栄一 1978年 7月 『沖縄伝剛柔流空手道』 実業の世界社 pp.14-24所収
- 33 昭和15年10月22日付の『沖縄日報』

※ 新聞記事の引用にあたっては、箇条書きになっている部分および段落のあらたまりの箇
所を「/」で示した。